慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	会話の応答におけるメタ言語表現の使用：言語形式への言及
Sub Title	
Author	田中, 妙子(Tanaka, Taeko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2023
Jtitle	日本語と日本語教育 No.51 (2023. 3) ,p.65- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20230300-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』51：65–79（2023.3）

会話の応答におけるメタ言語表現の使用

―言語形式への言及―

田　中　妙　子

1.　はじめに

本研究では、会話において参加者が何らかの言語形式を発話し、それを聞いた相手が応答するという展開を一つの単位として、その応答に見られるメタ言語表現を研究対象とする。ここで言うメタ言語表現とは、自分または相手の用いる言語コードについて言及する表現を指す。

従来、日本語教育の観点から、独話、あるいは発話者が一度に比較的まとまった量の発話をする討論等を研究対象とすることが多かったメタ言語について、会話という双方向のやりとりの中での働きを明らかにすることが研究の目的である。

田中（2018）では、研究の端緒として、シナリオから採集した用例を分類し、会話の応答におけるメタ言語表現を広く概観した。また、田中（2020）では、このようなメタ言語表現の中で特に会話の展開に言及する表現を取り上げた。この種の用例からは、応答者が相手の発話の会話展開上の異常に言及して不満を述べたり要求を出したりすることが、会話展開を修正・調整する機能を果たしているということが考察された。

本稿では、用例を更に増やし、応答者が相手の言語形式について何らかの言及をする際、どのような側面に意識を向けているかを考察する。次の作例のようなやりとりが典型的な例である。

A：ちょっと、そこの衣紋掛け、取ってくれる？

B：衣紋掛け…　今どきあんまり言わないよね。

A は衣紋掛け（ハンガー）を取ってほしいという表現意図を B に伝えようとするが、その発話の聞き手である B は「衣紋掛け」という A の語彙選択に反応し、A の表現意図とは直接的な関連性がない〈今の時代は『衣紋掛け』という言葉をあまり使わない〉という意味の応答をしている。このように発話者の表現意図とは異なる側面に聞き手が言及する発話が本稿の考察対象である。

2.　用語の定義

田中（2018）、田中（2020）と同様、分析の記述のため、会話参加者の一方が何らかの発話を行い、もう一方がその内容に応答するという発話連鎖を「第一発話」と「応答」に分ける。そして、第一発話を行う者を「第一発話者」、それに対して応答する者を「応答者」と呼ぶ。分析は「応答者」が「第一発話」のどのような要素について言及したかに注目して行う。なお、「第一発話者」は基本的には「応答者」に向かって発話をするが、三者以上が参加する会話では、それに当たらない場合もある。例えば、発話者 A と発話者 B のやりとりを発話者 C が聞いて、発話者 A、または発話者 A と B の発話に対して何らかのメタ言語表現を発するというような場合である。その場合は、発話者 C を「応答者」とする。また、「第一発話」は必ずしも一回のターンとは限らず、複数のターンによって構成されることもある。更に、「第一発話」と「応答」との隣接ペアの間に、別の発話や隣接ペアが入り込む場合もある。

3.　分析

分析に当たり、全体で 77 の発話例を扱った。用例は、問題とするメタ

言語表現を実線の下線で示し、必要に応じて、言及する第一発話者の発話に波線を引く。また、［　］に筆者が内容理解のための補足情報を加え、【　】に用例の略称を記す。略称の一覧は稿末に記す。

3-1　語形・文法に関する言及

用例は少ないが、第一発話の語形・文法に言及し、その誤りを訂正するためにメタ言語表現が用いられる。

例 1 は「落とし前」を「おととし前」と発音して語形を誤ったこと、例 2 は「（父親が）帰って来る」という未完の行動に「帰って来た」という完了を表す動詞を使って文法を誤ったことに言及し、誤りを修正して相手を正しい認識に導こうとしている。

例 1　　静磨「決まってんじゃねえか、おととし前つけてもらうよ！」佐倉「『と』が一つ多い！」【ゆとり 117】

例 2　　［ブンジは、父親が退院して飲み屋で酒を飲んでいるのを見るが、ブンジの母親であるサイバラはそのことに気付いていない。］ブンジ「ねえねえ、おとーさん、いつ帰って来たの」サイバラ「帰って来たじゃなくて、帰って来るでしょ」【毎日 29】

3-2　意味に関する言及

3-1 は語形や文法に関する言及であるが、本項はその言語形式が持つ意味、または含意への言及である。例 3 は「大事になさってるとこあるんですよ」という言語形式から、逆に〈大事にしていないところもある〉という含意を、例 4 は「最初は恐かった」という言語形式から、〈今は恐くない〉という含意を読み取り、そのことについて相手の真意を確認している。

例 3　　［園枝は社長である一郎の妻。塚田は一郎の車の運転手。］塚田「社長って、奥さまのことを大事になさってるとこあるんですよ」園枝「あら、そう」と、一郎を見る。　園枝「とこがあるってことは、そうじゃないとこもあるってことね」【なぜ君 71】

例 4　依子「まあ別に危害は加えて来ないしね、、、まあ最初は恐かったけど」美紀「え待って待って、今は恐くないの？　やばくない？　恐がった方が良いよ」【徒歩 29】

3-3　語句に関する言及

第一発話の中で使われた語句の一部を取り立て、第一発話者がその語句を使用したことについて何らかの言及をするメタ言語表現である。否定的な言及が圧倒的に多かったが、これは人間同士の葛藤を描くことが多いドラマにおいては、それらの発話が次のストーリーを生み出す契機になる傾向があるためではないかと考えられる。この点については他のジャンルの用例採集によって再検討する必要があるが、本稿では採集された用例に基づいて暫定的に分類・分析を行った。その結果、語句に関する言及をするメタ言語表現の機能として大きく次の 4 種が見られた。

（1）語句使用の評価

（2）語句使用に対する違和感

（3）語句使用の否定

（4）語句使用の禁止

いずれも、第一発話者が期待しているであろう応答とは異なるため、このようなメタ言語表現によって、応答者と第一発話者との意識のずれが明らかになると言える。

以下、4 種の機能を順に見ていく。

3-3-1　語句使用の評価

第一発話の中で使われた語句の一部を取り立て、何らかの評価をする。用例には批判的な評価が多かったが、可能性としては肯定的な評価もあり得る。例 5 では、第一発話の波線部分の中の「誘導」という語について、応答者が〈「誘導」という表現は不適切だ〉と批判している。例 6 では、第一発話の「最強」という語について、応答者が〈自分の現在の状況に対し

て「最強」という言い方は変だ〉という評価を述べている。同様に例 7、8 では第一発話の中の「命拾い」「妖精みたいだ」という語句を取り立て、〈「命拾い」というのは、自分が劣勢に立たされていたが何とか救われたというような言い方だ〉〈「妖精みたいだ」という美しい言い方（比喩）は事実を表していない〉というような不満・批判を述べている。

例 5　［裁判で弁護士同士が争っている。］勅使河原「ほお、つまり今君が話した事は、弁護士による誘導によって形成された記憶だと……」黛「意義あり！　誘導という表現は不適切です！」【リーガル 112】

例 6　［卓巳は、自分が好意を寄せている女子生徒から逆に交際を求められたと福田に告げる。］福田「うそ。全然分かんなかった。てか何なの！　好きな子が告白してくるって何なの！　最強じゃん」卓巳「最強って言い方おかしい」【ふがい 254】

例 7　［裁判で弁護士の三木が劣勢に立たされたが、裁判長が閉廷を宣言したおかげで、何とか収拾した。］教育長「いやいや、有難うございました、ひやっとしましたよ」井手「裁判長が変わりモノで命拾いしましたね！」三木「命拾いだと？」井手「あッいや、あの」三木「俺がやばかったみたいな言い方だな貴様ッ。あんなのは信用性がなくて当然なんだよ！」【リーガル 119】

例 8　［麦田は自分の子供たちに体育座りをさせるので、トレーナーの裾が広がっている。］サイバラ「（麦田に）みんな妖精みたいだね」麦田「そんな言い方ちがうでしょ、正直に言って」サイバラ「すっげえ貧乏くさい」【毎日 10,11】

3-3-2　語句使用に対する違和感

第一発話の中で使われた語句の一部を取り立て、それに対する違和感、あるいは不満、批判などを述べる。前項のように具体的な評価をするわけではなく、例 9～12 に見られるとおり、「～って何？」「何、それ」「何て言った？」「～って言った？」など疑問の形で、第一発話の言語形式が持つ表現意図に疑問を投げかける発話をする。例えば例 9 では、第一発話者が「どっちでも」と気のない返事をしたことについて、応答者が、〈「どっ

ちでもいい」という気のない言葉はどういう気持ちで言っているのか〉と質問することで、相手に対する不満の気持ちを述べている。その他、例 13 のように「～って…」と言いさし、相手に対する違和感を示す例も見られる。例 13 では、「書いてある」という第一発話の言語形式を引用して言いさし、医師でありながら家庭用の医学書に書いてある説明を引用するだけの第一発話者に対して、不安・困惑の気持ちを表している。

例 9　［茜は正和にステーキ肉の焼き方を聞くが、考え事をしていて気のない返事をする。］茜「焼き方は？　レア？　ミディアム？　ねえ、まーちん」正和「どっちでも」（略）茜「何？　どっちでもって。ここ私ん家！　今二人の時間！　肉の焼き加減より重要なことはない！」【ゆとり 56, 57】

例 10　［若井は使ったしゃもじを釜の上に置く癖がある。］長井「前に言わなかったっけ？　そうするとオカマの蓋のところが汚れちゃって不潔だから使ったしゃもじはオカマの中に入れてね」若井「ええ？」長井「ええってなに？」若井「長井さんオカマの中にしゃもじ入れるから、しゃもじが熱くなってイラッとするんすよ」【徒歩 37】

例 11　［拓自は織江に頼み事をするが、詳しいことを説明しない。］織江「どういうこと？」拓自「いえないよ」織江「人に物を頼んでそれはないでしょ」拓自「いえないことはあるだろう」織江「どんなこと？」拓自「誰だって、いえないことかかえて、別の話をしてるんだ」織江「いま、なんていった？」拓自「誰だっていえないことをかかえて、別の話をしている」織江「別の話なの？」拓自「そうともいえる（と織江の目を見る）」織江「なに、それ（と拓自の目を見る）」【ナイフ 33】

例 12　［認知症を患う八重は娘の志賀子を使用人だと思っている。］八重「ここはわたしの家だよ。文句があるなら出てけ！」志賀子「（悔しい）それが出来ればとっくに出てます！」八重「使用人の分際で偉そうに」志賀子「使用人？！　使用人って言った？！」【わが母 24】

例 13　［車内で妊婦の陣痛間隔が短くなってくる。医師の伊野と相馬は産婦人科の経験がなく、伊野は家庭版医学書を見ている。］伊野「どんどん早くなってない？『初産の場合は14時間～15時間かかります』て書いてある」相馬「書いてある、って……」伊野「……あんた、試験受かったばっかりでしょ」相馬「本物見たことなんかないですもん」伊野「俺だってないよ！」【ディア 191】

3-3-3　語句使用の否定

第一発話の中で使われた語句の一部を取り立て、「～じゃない」という否定表現を用いてくり返す。取り立てた語句が表す第一発話者の認識・態度を強く否定することによって、非難したり、困惑の気持ちを示したりする機能がある。例 14 では、第一発話者が「いやいや、それは…（できない）」という言語形式によって遺体の確認を拒否するが、応答者が〈拒否している場合ではない〉という意図を示すために、「いやいやじゃなくて（＝拒否している場合ではなくて）」という発話をしている。例 15 は第一発話者が「オシッコ漏らしちゃってますね」「そうかもしれませんね」と自分の仕事について他人事のように話すのを無責任と捉えた応答者が〈他人事のように話している場合ではない〉と非難する意図を示すために、「～じゃないんだよ」という表現で第一発話者の発話を否定している。例 16 では、呑気に挨拶をする第一発話者に対し、応答者が〈もうサンバの練習が始まっている〉という情報を与え、〈呑気に挨拶をしている場合ではない〉と非難する意図を示している。

例 14　［正和は身元不明の遺体が自分の同僚かどうかを確認するよう医師に求められて、動揺する。］医師「中入って確認して下さい」正和「いやいや、それは…」医師「いやいやじゃなくて」正和「いやいやいや、無理です、すいません（と頑なに拒否）」【ゆとり 46, 47】

例 15　［玩具会社。ミニカーで遊んでいる子供をビデオで撮影している。］モニターを指差し、　佐和子「あ、部長、すいません。二番の子…たぶんオシッコ漏らしちゃってますね」高木「…オシッコ漏らしちゃってますねじゃないんだよ、君が片付けるんだよ」佐和子「あ、はい、すいません」高木「それが君の仕事だろ」佐和子「…まあそうかもしれませんね」高木「かもしれませんね、じゃないんだよそれが君の仕事なんだよ。それと君ね、片付け終わったらこの前の資料持ってきて」【川の底 40】

例 16　石田「おい、世之介」世之介「あ、石田先輩。こんにちは」石田「こんにちはじゃねえよ、お前、練習始まってんだぞ？」世之介「なんの？」石田「サンバに決まってんだろ！」【横道 33】

3-3-4　語句使用の禁止

第一発話の中で使われた語句の一部を取り立て、「その言葉を使うな」「そのように言うな」と使用を禁止する表現である。例 17～20 では、「失敗」「ボランティア」「女」「出来てた」という語が応答者にとって不適切、または不快な語であるため、それを止めさせるためにメタ言語表現が用いられている。また、例 21 では、第一発話者が使った「餌」という語に対して、飼い猫を家族の一員のように愛している応答者が反応し、〈「餌」と言わずに、「ご飯」と言ってほしい〉ということを述べている。

例 17　［宗貴は地ビールの委託生産に失敗する。母親の和代に早く子供を作るように言われて］宗貴「商売が！　経営が軌道に乗ってから！」和代「失敗ビールで借金しちゃったしね」宗貴「失敗って言うな！」【ゆとり 90】

例 18　［大竹は、伊野医師が高齢者のために自発的に訪問診療を行っていることを相馬医師に伝える。］大竹「相馬先生も行かれます？　お金出せませんけど」相馬「え、ボランティアですか」伊野「あの、ボランティアてやめて」ばつが悪そうに相馬を制する伊野。【ディア 187】

例 19　［陽三は友人と織江の関係に嫉妬している。］陽三「オレはな。人生ふりかえって、あいつがオレの気持ちを分かってないのが一番口惜しいんだ」織江「あんたもいい人よ」陽三「だったら一緒にそういってくれよ。この齢になって、あいつに女をとられたくねえよ」織江「女なんていわないで」【ナイフ 27】

例 20　次男「そうですか（とソファへ）」織江「なにが？」次男「根本さんと、出来てたんですか」織江「そんないい方しないでよ（と苦笑）」【ナイフ 30】

例 21　［夫婦がチビトムという猫を飼っている。］ご主人「おい、チビトムの餌、なくなってたよ」奥さん「もう、餌じゃなくて、ご飯。買ってきた。さ、チビちゃん、御飯にしましょう。（略）」【私は 221】

3-4　述べ方に関する言及

第一発話者の言語形式全体の述べ方について言及するメタ言語表現である。第一発話者の述べ方に対して、冷淡である、無礼である、下品である、

不適切であるといった否定的感情を持っているため、例 22～25 のように「そういう言い方はするな」「そういうことを言うんじゃない」「そういう言い方はないだろう」など、第一発話者の「言い方」に対する非難の表現が多く現れる。例 26 の「たのちいでちゅか？はないと思うなぁ」は、不機嫌そうな様子の子供に〈楽しいか〉という質問をわざわざしたことに言及し、その質問のし方が不適切で配慮がないと批判している表現である。

例 22　［弘美は友人が殺され、気力を失ったままでいる。］隣室で言い合う、両親の声が聞こえる。　父の声「弘美はいつまであんな風なんだ？」母の声「そういう言い方しないでよ。あの子、まだショックから立ち直れないんだから」【相棒砂の 73】

例 23　［八重は伊上（息子）の妻が誕生祝いの品を八重の弟に送ったかどうか、疑う。］八重「本当に送ったかどうかわかったもんじゃない」伊上「そういう言い方はないでしょう」八重「あんたは世の中のことがまったくわかってない」【わが母 18】

例 24　［耕介は店長に、真琴が醤油を飲んで自殺しようとしたが失敗したことを話してある。］真琴「初めまして」店長「醤油薄めて飲んだ人ね」耕介「そういうこと言うんじゃないよ」【今夜 86】

例 25　［店長は、これからデートをする耕介に恋愛指南をする。］店長「飯食った後、押し倒せ」耕介「ちょっと待ってよ」店長「こういうのは、先に手、つけたほうが勝ちなんだよ」耕介「そういう言い方は」店長「世の中は、きれい事だけじゃ済まねえんだよ」耕介「だけど、相手の気持ちもあるじゃないか」【今夜 121】

例 26　［動物園。佐和子が恋人健一の連れ子の加代子（5 才）に話しかける。加代子は不機嫌。］佐和子「……加代子ちゃん、たのちいでちゅか？」健一「え？…加代子、楽しいか聞かれてるよ」（中略）健一、佐和子のそばに来て、　健一「たのちいでちゅか？はないと思うなぁ、俺は。まあでもね、徐々に慣れていけばいいと思うよ」【川の底 42, 43】

その他に、第一発話者の述べ方に対して、例 27～39 のような評価をするものが見られた。

例 27　「言葉に気をつけて下さい」【リーガル 97】

例 28　「いちいち言わないでください」【僕ら 61】
例 29　「ちょ、ちょ、ちょっと、好き放題言わないで」【神聖 54】
例 30　「口先でものをいうな」【ナイフ 15】
例 31　「べちゃくちゃしゃべるな」【一枚 141】
例 32　「ばっさり言ったね」【ゆとり 128】
例 33　「言い過ぎだよ」【今夜 77】
例 34　「一丁前のこと言うじゃない。」【ポチ 50】
例 35　「ものは言いようだな」【クローン 22】
例 36　「まったく、ほかに言葉を知らんのか。」【ゴールド 127】
例 37　「うわ、爆弾発言」【神聖 54】
例 38　「なんすかその極論」【ディア 210】
例 39　「不躾になんです？」【相棒ストレイ 91】

3-5　理解に関する言及

第一発話者が難解な語彙や分かりにくい表現を使ったために、理解が難しいということに対して不満や困惑の気持ちを示すメタ言語表現である。例 40、41 では、第一発話の波線部分の語彙が難解で、意味が分からないという不満・困惑の気持ちを応答者が述べている。例 42 は第一発話者の比喩が分かりにくいということを応答者が述べている。

例 40　長井「えわかんない、じゃあそれは見解の相違だから、しょうがない」若井「なんすかそれ？　難しい言葉で惑わさないでください」【徒歩 38】
例 41　和美「やみくもにアピールするよりも、ターゲットを絞らなくちゃダメ」公平、メモしながら、 公平「ターゲット？」和美「まずね、市議選の場合、短期決戦の特化型選挙って言われてねね、漫然と選挙活動してもダメなの。三千票あれば当選するんだから」智子「ねー、日本語で話そうよ」【民衆 56】
例 42　［大学時代の友人が依子のアパートのポストにラブレターを直接投函し、ストーカーのようになる。美紀に恐くないのかと聞かれ］依子「うーん前ほど恐くないなんか、野生動物がやってくるホテルみたいな感じ？」美紀「なにその喩えわかんない」依子「だからライオンが来るホテルみたいな」【徒歩 29】

3-6　明瞭さに関する言及

第一発話者の言語形式が明確ではなく、情報が不十分であったり曖昧であったりするということに対する不満や困惑の気持ちを示すメタ言語表現である。例 43 では用件を明瞭に示さない第一発話に対して応答者が〈はっきりしろ〉と要求し、例 44 では「なんかで」「～に類する何か」「なんかそれみたいだなあ」「あれが」など、対象を明確に限定できない表現を「黒く塗りつぶされた部分」と呼んで、困惑の気持ちを示している。

例 43　大輔「うまくはご説明はできませんが、おかしいです。だからまず彼女のインタビューをお撮りしてみようかと」城島「そうか、たのんだぞ。じゃあな（電話を切ろうとする）」大輔「いやいやいや、で、それで、ですね、あの……」城島「ん？」大輔「あれですね」城島「何だよオマエ、はっきりしろよ」【くそガキ 53】

例 44　［昔のヨーロッパの暴君の話をしているが、記憶が曖昧。］　美紀「ええじゃああれなんだっけなあ、なんか、女の人のなんかで改心するんだよなあ」依子「なに女の人のなんかって、愛？」美紀「愛かそれに類する何か」依子「何？　愛に類する何かってなに？」美紀「忘れちゃったなんかそれみたいだなあって、凄い思ったんだよねえ、パパのあれが」依子「黒く塗りつぶされた部分が多くて伝わらないよ」【徒歩 34,35】

3-7　繰り返しに関する言及

ある言語形式によって表される話題が繰り返されていることに対して不満や困惑の気持ちを表すメタ言語表現である。例 45～49 のように、「聞きあきた」「何度聞くのか／何回リピートするのか」「同じことを言った」「またその話」など、繰り返しに対する不満を表す表現が現れている。

例 45　［アルコール依存症］カモシダ「俺、酒やめるから」サイバラ「……聞きあきたよ、それ」【毎日 22】

例 46　伊丹「不審な手紙が届いたから、真相を確かめるために、あの場所に行った。本当にそれだけか」小沼「だからそう言ってるでしょ。何度同じこと聞くんですか」【相棒砂の 74】

例 47　「おい、何回リピートすんだよ！」【なにも 190】
例 48　「久美子、それ出掛ける前にも同じこと言った」【なにも 190】
例 49　「またその話か……」【クローン 11】

また、例 50 では、第一発話者が頻繁に使う「しあわせになりたい」、例 51 では会話参加者の「大ちゃん」が頻繁に使う「世界観」という大げさな表現がまた出たというからかいの気持ちが表されている。

例 50　智子「でも、あたし、しあわせになりたいもん」公平「出た！　大げさ」駿平「大げさ！　大げさ！」智子「なんでよ。二人ともしあわせになりたくないの？」【民衆 45】
例 51　花岡「劇場公開デビューの話あるんだよ。な、大ちゃん」シンゴ「マジかよ」ミノル「嘘だろ」花岡「嘘じゃねえよ。マジだよ。大ちゃん、それなのに自分が撮りたい世界観じゃないからって断ろうとしてるんだよ」シンゴ「でた、世界観！」【くそガキ 50,51】

3-8　待遇表現に関する言及

敬語や呼称など、第一発話者の待遇表現の使用に関する違和感を述べるメタ言語表現である。例 52～54 は対等な立場であるはずの第一発話者が丁寧語の「～ます」や「はい」という丁寧な表現を使うのを応答者が止めている。今回採集した例は、いずれも「敬語を使うな」と制止するものであるが、逆に「敬語を使え」と要求する例もあり得よう。

例 52　琴子「座っていい？」瀬川「あ、いや、お邪魔でしたらぼくもそろそろ寝ますので」琴子「敬語はやめてよ」瀬川「急にそう言われても」【わが母 31】
例 53　［受験勉強をしていることを知って］正和「なんか…いろいろ誤解してました」まりぶ「ちょっと、いつから敬語？」【ゆとり 68】
例 54　［マキ子とタマ子は同級生。］マキ子「そうだあ。え、みんな会った？」タマ子「いや、まだ……はい」マキ子「なんで敬語（と笑い）。えー、そっかあ……マナミとか会おうって言ってんだけど」【もらとりあむ 306】

例 55～58 は呼称の問題である。例 55 は第一発話者が話題の男性を呼び捨てにしたので、それを応答者が制止している。例 56 は第一発話者が知り合って間もない「唯」という名の女性を呼び捨てにしたことに違和感を持った応答者が〈いつの間に呼び捨てをするような親しい関係になったのか〉と質問している。例 58 は第一発話者の「ババア」という呼び方が無礼であったことに対して、応答者が不満の気持ちを述べている。

例 55　美紀「何よ、行ったんでしょ？　光一の所」依子「行ったよ呼び捨てしないで」【徒歩 24】

例 56　倉持「俺、こんな合宿来る気なかったんだよ。でも唯が顔合わすたびに誘うからさあ」世之介「お前、いつの間に呼び捨てになったの？」【横道 13】

例 57　［山路が正和の恋人を「茜ちゃん」と呼んだ。］正和「あんたが黙って…ていうか、茜ちゃんてなに!?」山路「え？」正和「茜ちゃんて呼んだよね、山路くんさっき、茜ちゃんのこと、まあ、茜ちゃんなんだけどさ、でも茜ちゃんて呼ぶ？　茜ちゃんのこと、たった1回遊んだだけで」【ゆとり 99】

例 58　［まりぶ、正和の母親を呼んで、ビールを注ぐよう促す。］まりぶ「注げよババぁ！」正和「ババアはちょっと…ないわ」【ゆとり 106】

3-9　言語形式に表れる敬意・配慮に関する言及

相手に対する敬意・配慮のない無礼な話し方を批判するメタ言語表現である。例 59～63 のように、「口の利き方」「口に気をつける」「言い様」などを含む言語形式が多い。また、例 63 は「面接に来ました」と文末まできちんと言わず、「面接」と単語で説明する第一発話者の無礼さを応答者が非難する発話である。

例 59　［裕子はコールセンターのオペレーター。］浩子の声「お客さま？　どうかされましたか？」中年女「はあ？　なに、その口の利き方。だいたいね、あんたんとこのパソコン、ややこしいのよ。それってあんたたちの責任でしょ……」【民衆 44】

例 60　［西井は警官。］柴田「なんだね？」西井「おはようございます。今の

はちょっと無理されましたねぇ。信号、赤に変わっていましたよ。免許証、お願いします」柴田「新人か？」西井「え？」柴田「口のきき方からなっとらん」【ゴールド 121, 122】

例 61　［光輝の娘が母親を「ばばあ」と罵る。］光輝「口に気をつけろ！」【神聖 51】

例 62　伊上「（腹立ちまぎれに）わかりました。お気の済むように探しておきます」八重、黙って伊上の顔をみつめている。伊上、居心地悪くなる。
　八重「（蔑んで）今の言い様……。『土蔵のばあちゃ』そっくり」【わが母 18】

例 63　安喜子「お父さんは、黙っててよ」父親「なんでい、その言い方は」【学校へ 25】

例 64　［雷音が善の店を訪ねて来る。］雷音「え、ここの？」善「だからなんだ」雷音「面接」善「面接？」雷音「タウン誌で募集しなかったですか、長野市の」善「じゃなくて、面接に来ましたってなんで言えないの」【大鹿 105】

4.　まとめ

本稿では、会話において聞き手が相手の言語形式について何らかの言及をする際、どのような側面に意識を向けているかをメタ言語表現の使用という観点から考察した。日常会話においては、発話を調整しようという明確な意図の下にメタ言語表現が使われているとは限らず、さまざまな心情の自然な発露から無意識に発話されることも多い。会話をする際、参加者が常に協力的に流れを形成していくわけではないので、こうしたメタ言語表現によって相手と自分との意識の違いや距離を測りつつ、話題や発話内容を調整していくということなのであろう。

3-3 で述べたようにドラマという用例資料の性質上、否定的なメタ言語表現が多かったが、実際には肯定的な表現もあるはずである。その点は、資料のジャンルを変え、改めて検証したい。

用例資料

【今夜】三谷幸喜『今夜、宇宙の片隅で』第 1 回～第 4 回 フジテレビ出版（1998）

【ゆとり】宮藤官九郎『ゆとりですがなにか』第 1 話～第 4 話 KADOKAWA（2016）
【なぜ君】長谷川康夫・吉本昌弘「なぜ君は絶望と闘えたのか　後編」『テレビドラマ代表作選集』（2011 年版）
以下、日本シナリオ作家協会編『年鑑代表シナリオ集』所収
（2009 年版）【クローン】中嶋莞爾「クローンは故郷をめざす」／【ポチ】高橋玄「ポチの告白」／【ディア】西川美和「ディア・ドクター」／【私は】黒沢久子「私は猫ストーカー」
（2010 年版）【川の底】石井裕也「川の底からこんにちは」
（2011 年版）【毎日】真辺克彦「毎日かあさん」／【神聖】入江悠「劇場版 神聖かまってちゃんロックンロールは鳴りやまないっ」／【大鹿】荒井晴彦・阪本順治「大鹿村騒動記」／【一枚】新藤兼人「一枚のハガキ」
（2012 年版）【わが母】原田眞人「わが母の記」／【くそガキ】鈴木太一「くそガキの告白」／【ふがい】向井康介「ふがいない僕は空を見た」
（2013 年版）【横道】沖田修一・前田司郎「横道世之介」／【なにも】加瀬仁美「なにもこわいことはない」／【もらとりあむ】向井康介「もらとりあむタマ子」
以下、映人社『ドラマ』所収
【リーガル】古沢良太「リーガル・ハイ」（2013 年 5 月号）／【ナイフ】山田太一「ナイフの行方」（2015 年 2 月号）／【相棒ストレイ】真野勝成「相棒ストレイシープ」（2015 年 2 月号）／【徒歩】前田司郎「徒歩 7 分」（2015 年 7 月号）／【民衆】黒沢久子「民衆の敵」（2017 年 12 月号）／【学校へ】岡田麿里「学校へ行けなかった私が『あの花』『ここさけ』を書くまで」（2018 年 11 月号）／【僕ら】橋部敦子「僕らは奇跡でできている」（2018 年 11 月号）／【ゴールド】鳴尾美希子「ゴールド！」（2018 年 12 月号）／【相棒砂の】山本むつみ「相棒砂の記憶」（2023 年 2 月号）

引用文献

田中妙子（2018）「会話の応答に見られるメタ言語表現―シナリオを例として―」『日本語と日本語教育』第 46 号 pp. 31–44
田中妙子（2020）「会話の応答におけるメタ言語表現の使用―会話展開への言及―」『日本語と日本語教育』第 48 号 pp. 19–30